

# ウポポイに行きたかったけど、行けなかった話。

恵庭市調べる学習コンクール



北海道博物館

**黒氏 奈那美**

2020年9月27日  
恵明中学校1年8組

## はじめに

ある日、母にウポポイに行こうと誘われました。ウポポイ（民族共生象徴空間）とは、白老町にできた、アイヌ文化の復興と発展のナショナルセンターです。せっかくウポポイに行くなら、まずは、アイヌのことを調べたらと言われたので、恵庭市立図書館に行って、アイヌの本を探してきました。6冊の本を借りて、前の日に読んで、いざ出発と思ったのですが…、人気が高く、入場券が手に入りませんでした。ちなみに母は、あまりにも人気があるその施設のことを、当日行けば入れると思っていたようでした。テレビ番組で特集していたウポポイに、レストランや体験コーナーがあるのを見て、料理も美味しそうで楽しそうだし、明日行こうと突然の思いつきで、言ってきたのでした。

今年、オープンしたばかりのこの施設に、結局は行けなかったのですが、代わりに江別市の北海道博物館に行って、アイヌに関する展示を見てきました。これは、その体験と図書館から借りてきた本からの情報をまとめたものです。

ウ ア イヌ コ ロ コ タ ン

## ウポポイ(民族共生象徴空間)園内MAP



## 目 次

1. アイヌとは. . . . .	3
2. アイヌの世界. . . . .	4
3. アイヌの住まい. . . . .	10
4. アイヌの食事. . . . .	14
5. アイヌの生活. . . . .	15
6. アイヌのおしゃれ. . . . .	18
7. 盛んだった交易. . . . .	22
8. 戦うアイヌ. . . . .	24
9. まとめ . . . . .	28
10. 調べた資料 . . . . .	29

## 1 アイヌとは

北海道には、もともとアイヌという先住民族が住んでいました。

私の先祖はおじいちゃんのおじいちゃんの時代（明治時代に）に北海道に山口県から来た和  
人です。私達、和人が本州からたくさん渡って来る前には、アイヌの人々が住んでいました。

アイヌとはアイヌ語で人間という意味です。アイヌの人々は自分たちの住んでいるところを  
アイヌモシリと呼び、狩りや漁、山菜や木の実の採取、そして他民族との交易を行って暮らし  
てきました。



100年前のアイヌ美人

アイヌは彫りが深く、手足が長く、美人が多かったようです。

## 2 アイヌの世界

アイヌはカムイを大切にしていました。

またアイヌ民族は人間を取り巻くすべてのものがカムイであると信じていました。火や水、樹木や動物、雷などの自然現象、更には船や臼、食器といった生活用具もカムイと考えてしていました。そして人間に豊かな恵みをもたらしてくれるカムイにいつも感謝しながら生きていたのです。

このようにアイヌはアイヌだけで成り立つものではなくカムイと共にあってこそ生きていけると考えていました。

カムイは用事のある時にアイヌモシリに行ってきます。熊、狼、鹿などの動物、オオウバユリやイラクサなどの植物、火や、水などの姿になって現れます。時には悪い病気や災害を運んでくるカムイも現れます。

○位の高いカムイとして尊敬されるのは？



クマ〈キムンカムイ〉

シマフクロウ〈コタンコロカムイ〉

狼〈ホロケウカムイ〉

火〈アペフチカムイ〉

○恐ろしいカムイ

伝染病（疱瘡、天然痘）のカムイ〈パヨカカムイ、オリパクカムイ〉

飢饉のカムイ〈ケムラムカムイ〉

○そそっかしいカムイもいました



キツネ〈チロンヌプ〉

カエル〈テレケイペ〉

アイヌの人たちが一番重要だとするのは、クマのカムイを送るイオマンテです。クマの肉を食料として恵まれた、アイヌの人たちからの大きな感謝の気持ちをこめた儀式です。

カムイが好むとされるイナウやお酒、団子、タバコなどを祭壇に供え祈りを捧げます。アイヌの男性がイナウやキケウシパスイを仲立ちにして、カムイに人間の言葉を伝えます。カムイはこのような儀式をされてカムイモシリにその霊を送られるとカムイモシリに帰ってから他の神々から褒められると考えました。そして再びアイヌモシリにお土産となる食料（肉）を背負って行ってきてくれるのです。反対にカムイを粗末に扱うとカムイも怒って食料を出してくれないと考えたのです。



## ○神々の世界

カムイモシリはアイヌモシリとは時間の流れが反対で、アイヌモシリが昼の時、カムイモシリは夜の時間です。カムイがアイヌモシリに来る時には様々な姿、例えば熊や狼の姿をしていますがカムイモシリに帰れば人間と同じ姿になります。獲物が取れるのはアイヌの人たちの普段の行いをカムイが見ている心かげの良いアイヌのところを選んで行ってくるからだとアイヌの人たちは考えました。矢で射て獲物が取れるのはその矢をカムイの方が受け取ってくれるからでカムイが矢を進んでとってくださることはアイヌの人達にとっては誇らしいことなのです。



矢を持つアイヌ



現存するアイヌの写真

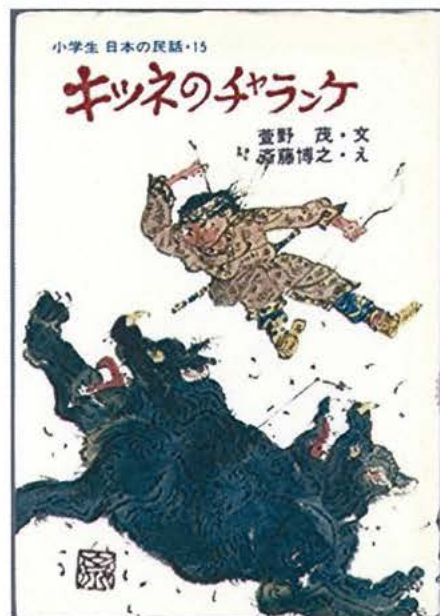
### ○人間の世界

アイヌの人たちの住むところをコタンと言います。コタンにはチセ（家）があり2、3軒の家しかなくともコタンと言いました。十数軒も家があれば大きいほうでした。一つの家には夫婦が一組とその子供たちが住むのが基本です。村にはコタンコロクルという村長がいて、村の重要な取り決めなどをする場合の中心的な役目を果たしていました。男性は山猟や川や海での漁、女性は山野草などの採取、手仕事の材料を得るなどの仕事をしますが、そのほとんどはコタンごとに範囲が決められた場所があって、そこで生活に必要なものをまかさないです。この活動範囲をイウオロと言います。



争いごとはそれほど多くありませんが、たまに起きることがあります。そういう時は何事も話し合いで解決する方法をとっていました。アイヌにはパウエトクという言葉があります。これは雄弁と訳されます。アイヌ社会では争いごとの解決には、**チャランケ**というやり方を取りました。とことん話し合います。アイヌの人たちの中の揉め事で、一番多かったのは狩猟の際の相手側イウオロへの進入でした。これらを中心になって解決するのはコタンコロクルの役目です。コタンコロクルは雄弁であることが求められるだけではなく、勇敢、風格などとともに、知恵のあることも必要でした。

**キツネのチャランケ**というお話はとても有名です。恵庭市は千歳市の隣にあり、支笏湖は千歳市にある大きな湖で、このお話の舞台です。



支笏湖の近くに住む老人のアイヌが、ある夜に聞こえてきた声を聞きました。それは狐のチャランケでした。

「こら、アイヌども、よく聞け。鮭というものはアイヌがつくったものでもないしきつねがつくったものでもない。

石狩川の河口をつかさどるピピリノエクルとピピリノエマツという神さま夫婦が、アイヌばかりか、すべての動物が食べられるように、この川をさかのぼる鮭の数を決めてくださっているのだ。

ところがきょう、アイヌがとった、たくさんの鮭の中から、一匹とって食べたところ、そのアイヌは、わたしに向かって、アイヌが言える、ありったけの悪口を浴びせかけてきた。悪口は黒い炎となって、わたしに襲い掛かってきた。

そのうえにそのアイヌは、アイヌが住んでいるこの国土から、我々きつねを追い出すよう、すべての神々に頼んだのだ、神様がアイヌの言い分だけ聞いたなら、大変なことになる。神でもアイヌでも、わたしの言い分を聞いてくれ」

これをきいたアイヌは、驚きました。キツネの言い分は全部正しいのです。

鮭というものは、魚を食べることのできるすべての動物に、神さまが与えてくれた食糧なのです。それを知らない愚かなアイヌがいて、きつね神に悪口をいったに違いありません。

夜が明けるのを待って、わたしは村の人々を集め、そしてきのうきつね神に悪口をいったアイヌをうんとしかりつけ、つぐなわせました。

そして酒をたくさん醸し、イノウ（アイヌの祭具の一つ）をたくさん作って、きつね神に丁寧にあやまりました。そしてすべての神にアイヌの間違った頼みを聞かないように礼拝しました。

だから、これからのアイヌよ。すべての動物が、鮭でも鹿でも食べる権利を持っているのだから、決して人間だけのものと思ってはいけない、と一人の老人がいいながら、この世を去りました、と物語は結ばれます。

このお話は、今の世界でもまったく同じことだと思います。私たちが全ての食べ物を私たちだけのために取ってしまったたら、他の動物は生きていけません。

アイヌの世界はとても神秘的です。そして自然をととても大事にする民族です。もしも、この北海道がアイヌ民族の人たちがずっと住み続ける世界だったなら、今頃もう少し自然環境がよかったのかもしれない。

そして、最近おこっている大規模な自然災害は、アイヌの神さまが人間によくばるな！と怒っているのかもしれない。

### 3 アイヌの住まい



復元されたチセ

昔のアイヌの人たちは、食べ物や飲み水などが手に入りやすく、洪水などの災害に遭いにくい交通の便利な川の近くや海辺に、数件から十数軒の家でコタンと呼ばれる村をつくりました。

そして村おさを中心に、近くの山や川、海などの決まった場所で狩りや漁をしたり木の実や山菜をとって暮らしていました。

家のことをアイヌ語でチセと言いますがチセは20m～100mくらいの大きさでその地方で手に入れやすい材料を使ってコタンに住む人達が協力し合って建てました。



北海道博物館内のチセ

柱などの骨組みには、ヤチダモなどの硬い木を使いました。屋根や壁にはアシやススキ、笹などの草を使いましたが、キハダやカバの木などの皮を使ったという記録もあります。

骨組みや屋根、壁などの材料は釘を使わないで、ブドウつるやシナノキので内皮で作った紐などを使って結びつけました。



チセの中にある炉

チセの中に入ると入り口近くに炉があります。炉は部屋を温めたり、食事を作るだけではなく、大切な儀式にも使われました。窓は2、3箇所ありますが入り口の正面にある窓は神々が入り出す窓として、とても大切にされ、外から中を覗くことは許されませんでした。

主人や家族、客が座ったり寝たりする場所、宝物置く場所などもきちんと決められていました。

チセの周りには、祈りの場である祭壇や、食料を乾燥させるための物干し、食料を蓄えておく倉、捕まえた子グマを飼うためのオリ、男女別の便所などが作られました。

またコタンの近くには水飲み場や丸木舟をつないでおく船着き場をなどもありました。



チセの横にあるオリ。中に子熊が飼われた。

熊は大切な儀式イオマンテに使うために、飼われていました。

恵庭市にも大正の頃、島松沢と茂漁にチャシ（砦）跡がありました。チャシは柵で囲われるなどして、軍事的な意味だけでなく、指導者の住居や祭場などに使われていたと考えられています。



## 4 アイヌの食事

アイヌの食事はヘルシーでした。多分、肥満な人はいなくて、みんな痩せていたのだと思います。



再現されたアイヌ料理

### ○木の実や山菜の採取

春から秋にかけて女性や子供が中心になって木の実や山菜を採集しました。春にはギョウジャニンニクやフキノトウなど、夏にはオオバユリやはハマナスなど秋には栗、クルミ、ヤマブドウ、キノコ類などを取り、茎や葉、根、実を食用にしました。山菜採りでは全て取り尽くすようなことはせず、次の年のことを考えて残しておきました。また、家の近くの柔らかい土地を耕して畑を作り、ヒエやアワキビなどの穀物や豆、ジャガイモなどの野菜も栽培していました。穀物や山菜はサヨやラタシケブなどにして食べました。

アイヌ民族の伝統的な料理は、現在も儀式や祭りの時などに作られます。

### ○盛んだった保存食作り

人々は採集によってえた山菜や収穫した穀物を食料が少なくなる冬は飢饉に備えて、プ（食料倉庫）に貯蔵しました。例えば、オオバユリの球根からとったデンプンやその搾りかすを円盤状に固め、して保存食にしました。また、動物の肉や魚も天日干しにしたり燻製にしたりして貯蔵しました。サケを凍らせてルイペと呼ばれる保存食も作りました。



今でも北海道では、ルイベとしてよく食べられています。

私も鮭のお刺身は大好きですが、醤油がないと食べられません。アイヌの人たちに、調味料はあったのかと疑問に感じ、本を探しましたが、昆布などで汁物をつくったりしたとはあるものの、醤油は見つかりませんでした。ウポポイに行くことがあれば、聞いてみようと思います。アイヌの人は交易を盛んにしていたので、塩などを手に入れていたかもしれないと思います。

## 5 アイヌの生活

アイヌの人たちは儀式の時や親しい人達が集まった時に、歌ったり踊ったりしました。歌や踊りには神々に感謝の気持ちを伝えるとともに、普段の暮らしの中での喜びや悲しみを神々の人たちと分かち合いたいという気持ちが込められていました。





## ○歌と踊り

歌や踊りはその形は方法によって色々な種類があります。イオマンテなどの儀式の時の歌の歌や踊り、きねつきなどの仕事をする時や赤ちゃんをあやす時の歌、歌い手が自分の気持ちをその場で歌にして歌う歌などがあります。

ウボポと呼ばれる座り歌は数人の歌いたがシントコの蓋を囲んで座り、みんなで蓋を軽く叩いて拍子を取りながら歌われます。

ウボポは短い歌の言葉を少しずつずらして追いかけるように歌われることが多く、特徴のある響きを生み出します。

## ○ムックリ

ムックリは、アイヌの人たちの楽器の一つで、口琴とも呼ばれています。

材料は竹などを使い長さは10~15 cmくらいで幅は1 cm、厚さ2 mm くらいです。

板の真ん中には弁という切り込みがあり、演奏するときは弁の端につけた紐を引いて弁を振動させます。ムックリはその振動を口の中の空気に伝えながら鳴らす楽器です。



## ○トンコリ

主にサハリンに住んでいたアイヌの人たちの楽器で弦を両手の指で弾いて音を出します。音は和楽器の琴に似ています。

男の人はあぐらをかいてトンコリを左肩にかけて女の人は正座をして同じように左肩に立てかけて弾きます。

隣の千歳市ではムックリを習う小学校があると聞きました。いとこが通った小学校でも授業があったというので、きいてみました。糸を引くピンピンという音になるのだけど、うまい人だとビヨヨ〜と鳴ってリズムも刻めるそうです。

インターネットで調べると「MAREWREW」マレウレウや「OKI」オキさんがアイヌ音楽家として活躍しているようです。また、ウポポイでは、歌や踊りを上演しているので、本物を聞く事を楽しみにしています。



トンコリ



## 6 アイヌのおしゃれ

昔のアイヌの人たちは、普段の生活の中で身近にある材料を使って、それぞれの地域にあった色々な衣服を作っていました。衣服の材料には獣や魚、鳥の皮の他にオヒョウニレやハルニレ、シナノキなどの木の内皮や蕁麻の繊維などが使われました。

衣服の材料の中で1番古いのは、毛皮です。獣は毛皮を取るだけでなく、食料としての肉のほか骨や筋を使って狩りの道具や食器、飾り物、糸を作るなど、人々の暮らしにとって一番身近で大切なものでした。

本州や外国から木綿の布を手に入れられるようになると、その布を使って儀式や特別な時に着る晴れ着を作るようになりました。

今でも博物館などに残されている古い衣服のほとんどはこうした晴れ着です。晴れ着の中には中国との交易で手に入れた蝦夷錦と呼ばれる、絹で織られた衣服や和人との交易で手に入れた陣羽織などもありました。衣服の他に身に付けるものには、儀式や働く時にするハチマキ、手足を守るてっこう、きゃはん、冬に狩りをする時に使った帽子や鮭やアシカの皮で作った靴などがありました。



チエプケリ  
鮭皮靴



陣羽織



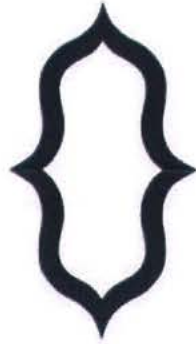
こうした衣服や身に付けるものには、アイヌ模様が刺繍されました。アイヌ模様には美しく飾るというだけでなく病気などを防ぐという魔除けの意味もありました。

アイヌ民族の衣服には独特の模様があしらわれています。アイヌ文様にはモレウ(渦巻き文様)やアイウシ(トゲ付文様)などがあり、それらを組み合わせたりして複雑な文様を表しました。

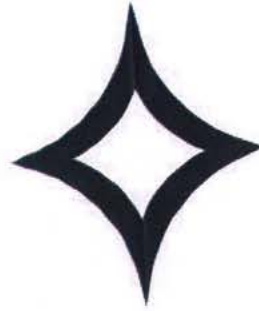
文様の表している意味



モレウ(渦巻)



アイウシ(刺)



シク(目)

<http://ainu.saloon.jp>

○モレウ (渦巻) [morew] モ (ゆっくり) レウ (まがる)

渦の文様には「力」「パワー」という意味があるという。ぐるりと巻いている形状の中に、秘めた力を感じとってほしい。

○アイウシ (棘) [ay usi?] アイ (矢) ウシ (突く)

棘の文様は「いばら・たんぼ」などの棘を意味している。ツンツンした棘を内包することで、外敵や病気などから身を守る「魔よけ」の思いが込められている。

○シキ (目) [sik/siki(hi)] シクともいう

星のようにも見えることから、空の星のようにやさしく見守るの意味がある。

## ○アクセサリー

アイヌ民族の女性達は儀式などの時、頭に鉢巻を締め、耳飾りや首飾りといったアクセサリーを身に付けました。首飾りにはレクトウンペという、首に巻きつけるチョーカーのようなものと、タマサイという玉飾りがあります。タマサイは大陸や和人ととの交易で手に入れたガラス玉をつないだもので、母から娘へと受け継がれました。耳飾りはニンカリといい、金属製の輪に小さな玉がついたピアスのようなもので、男性も子供の頃からつけていました。



## ○入れ墨

アイヌの女性は成長すると、口の周りや手の甲などに入れ墨をしました。刺青をする理由についてははっきりわかっていません。しかし刺青をしていないと一人前の女性として認めてもらえず、結婚することができませんでした。この風習は明治時代まで続けられました。男性は一人前として認められると、長く髭を伸ばしました。

今では、口のところに入れ墨をしている人は見たことがないけれど、私の祖父が小さい頃にはまだ入れ墨をしたアイヌが恵庭にも住んでいたそうです。男の人は毛深く、大きな人が多かったと聞きました。小学校と一緒に通ったそうです。

## 7 盛んだった交易

かつてアイヌ民族は和人や外国人と活発に交易を行っていました。どんな国々と何をやり取りしていたのでしょうか？



イタオマチブ

アイヌの人々は、イタオマチブと呼ばれる船で海を渡り、盛んに交易を行っていました。狩りや漁で得た鮭やニシン、昆布、動物の毛皮、鷹の羽などを積んで各地に出かけました。交易の相手は東北地方北部の和人や、中国東北部に住む少数民族の山丹人などでした。





和人との交易では米や塩、木綿、タバコ、鉄製品、漆器などと、山丹人との交易では絹織物やガラス玉などと交換しました。

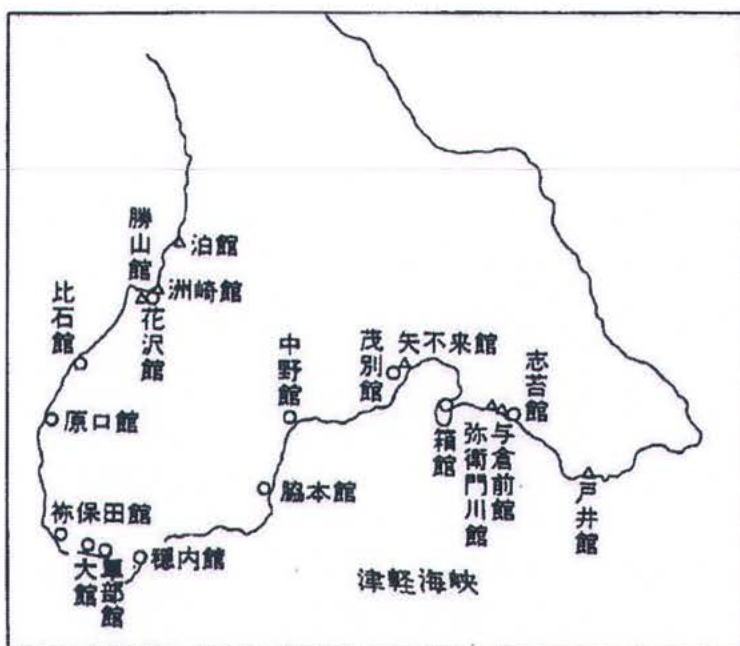


北海道博物館では、実際に交易でアイヌが持っていった品物がたくさん展示されています。中でも、多かったのは毛皮と魚です。大きなアザラシやクマの皮やキツネやテン、ラッコもいました。お魚は干物になっていましたが、毛皮はふかふかであたたかそうでした。でも、ラッコやきつねまで皮を剥ぐのはかわいそうだと思いますが、あの草の家では、アイヌたちが冬には寒さで死んでしまうかもしれないので、仕方がないのかもしれない。



## 8 戦うアイヌ

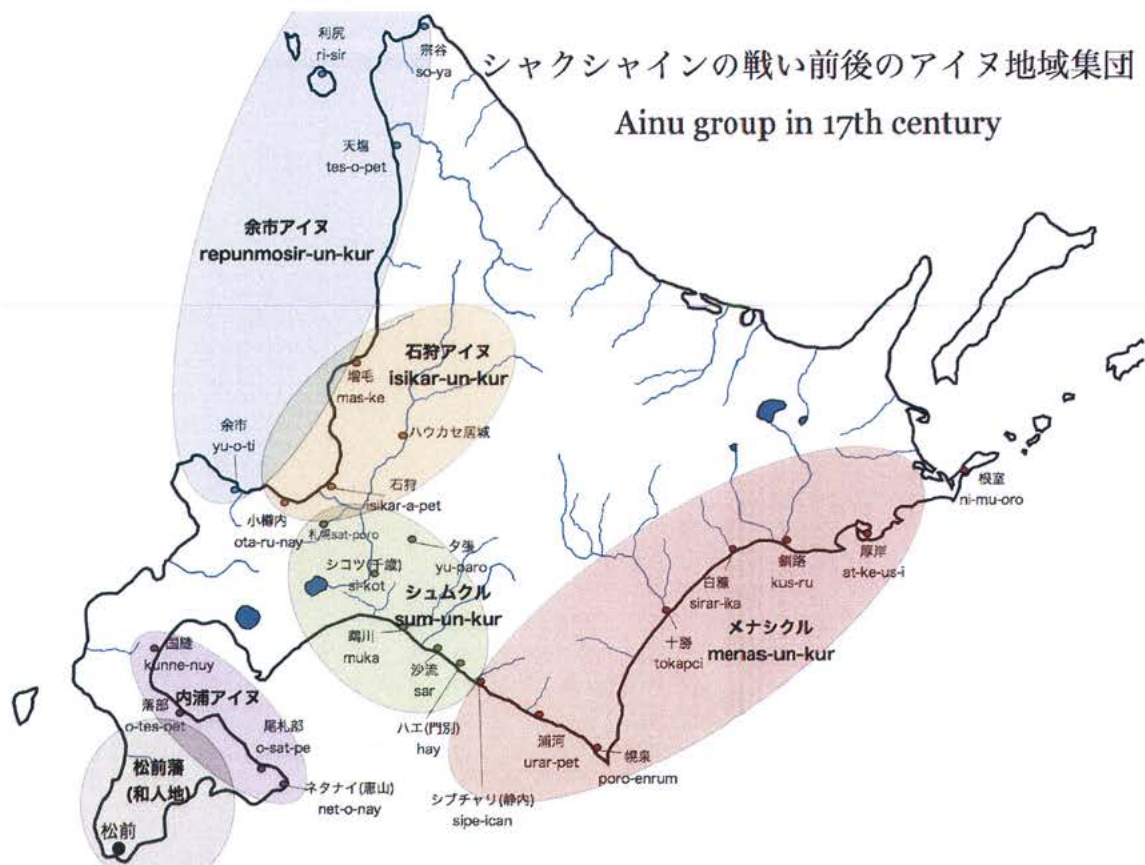
15世紀になると渡島半島に住む和人が増え、和人の拠点として12の館が築られました。そうしたなか、シノリ（函館）の村でアイヌの男性がマキリ（小刀）の出来具合を巡って、和人の鍛冶屋と言い争いになり、殺されるという事件が起こりました。この事件をきっかけに1457年は渡島半島のアイヌの人々が一斉に立ち上がりました。コシャマインをリーダーにする愛の軍は10の館を滅ぼしましたが花沢館（上ノ国町）の蠣崎氏の元にいた武田信広にせずめられました。



その後も戦いが繰り返されましたが、16世紀の中頃、蠣崎氏がアイヌの人々と話し合い、一旦平和が訪れました。

しかし、その後も戦争は繰り返されます。

1669年、シベチャリ（新ひだか町）の首長シャクシャインをリーダーとするアイヌの人々が、一斉に立ち上がり、和人の商船やさきん堀、鷹待を襲撃しました。初めはアイヌ軍が優勢でしたが、幕府の援軍を得た松前藩が次第に優位となり、その後、和解の席でシャクシャインが騙し討ちに会い、アイヌ軍は敗北しました。

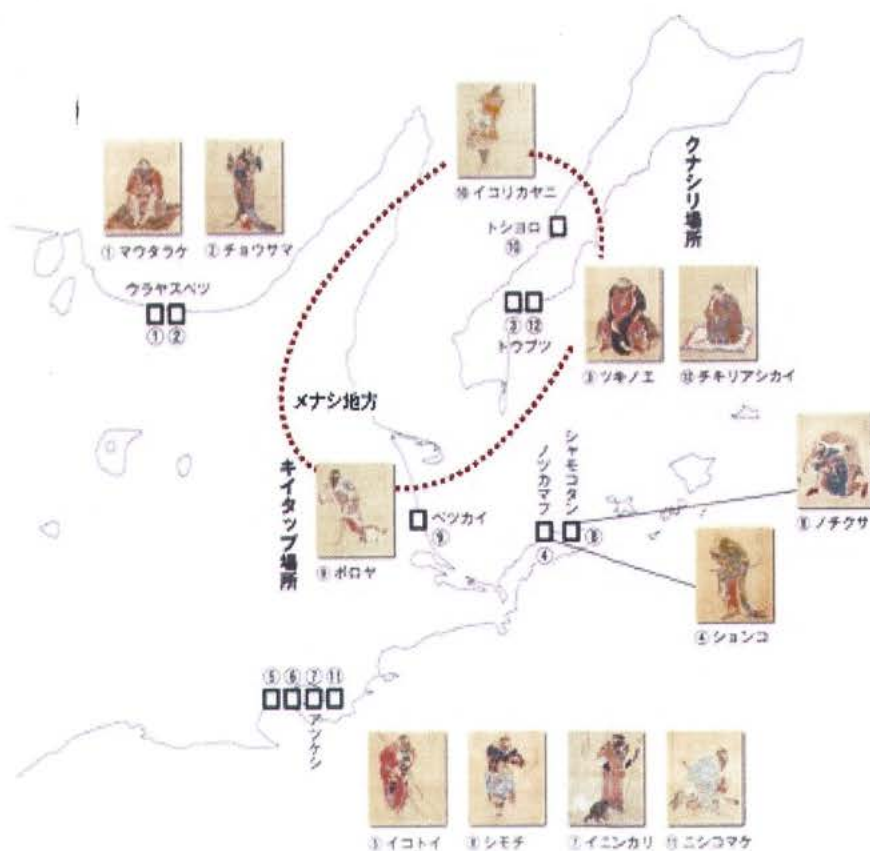


## アイヌ民族最後の戦いクナシリメナシの戦い

18世紀の中頃、和人の商人の活動範囲は国後島や、ソウヤなどにも及ぶようになります。商人たちは儲けを優先するあまり、漁場の見張り役に圧力をかけ、言うことを聞かないアイヌの人々に暴力を振るったり、脅したりしていました。たまりかねたアイヌの若者が中心となり、1789年、国後島とその対岸のメナシ地方で商人たちを殺害する事件が起こりました。

国後島の長老たちは戦いを治めるため、若者たちを説得して松前藩と話し合いをしようとしていました。しかし、松前藩は戦いの主導者たちを死刑にしまいました。この戦いが和人からは外国として見られていた蝦夷地が日本の中に組み入れられるきっかけとなりました。

和人の商人は利益を上げるため、アイヌの人々に食事も満足に与えず、昼夜関係なく働かせました。さらに、それまでアイヌの社会には無かった、天然痘などの病気を持ち込んだので、たくさんの方が亡くなりました。19世紀の初めには2万人以上いたアイヌ民族の人口は、約50年後には、1万数千人に減少しました。





『夷酋列像』（いしゅうれつそう）

蠣崎波響（かきざき はきょう）は、松前藩の家老で、江戸時代の有名な画家でした。

『夷酋列像』は、クナシリ・メナシの戦いの際に松前藩に助力したアイヌの有力者12人を描いた人物画です。

この美しい絵は、アイヌの美しさや強さをよく表していますが、この戦いで死んでいったアイヌの人のことを考えると悲しくなります。

## 9 まとめ

今回、調べる学習をしてみて思ったことは、アイヌの人たちがそのまま北海道に住んでればよかったのということです。私たちの先祖がアイヌに行ってきたことは、北方領土に住んでいた人に、ロシアがしたことと全く一緒だからです。ずるくて、一方的で、自分の事しか考えていないと思います。アイヌの人たちは可哀想だし、きっと悔しかったことでしょう。

もし、そのままアイヌの人たちしか住んでいなかったら、ここは日本ではなかったのかもしれませんが。そして、私自身はここには住んでいなかったのでしょう。今でも、エゾ狼が住んでいて、このあたりにはクマや鹿が自由に生きていたのかもしれませんが。

環境や動物たちのためには、きっとその方が良かったでしょう。

今回はウポポイに行けなかったのですが、いつかは行って、アイヌ料理をたべたり、音楽を聞いたりしてみたいと思いました。

## 10 調べた資料

「アイヌ文化の大研究」中川 裕／監修 PHP研究所

「いま学ぶアイヌ民族の歴史」 加藤 博文／編 山川出版社

「アイヌ民族の歴史といま」 知里 むつみ／著 汐文社

「アイヌ民族のことばと文化」 知里 むつみ／著 汐文社

「アイヌ民族：歴史と現在」 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

「恵庭年代記」恵庭100年記念誌 恵庭市